

葛城慕情

鐸木能光

渋滞の車の列は、まったく動く気配を見せていなかった。

三十分でほんの数メートルしか進んでいない。前方の橋を渡れば動き始めるだろうと思っていたが、その予測は甘かった。どうやらこの道の先はT字路で、突き当たったその道が、右折しようとしていて方向に別の渋滞を起こしているようだ。中央分離帯に区切られた一車線の道なので、Uターンするにもできない。

「まいったな。コンビニで地図が買えなかったのが敗因だな」

隣で運転している速水允彦はやみまさひこが、空港でもらった大雑把な関西の地図を見ながら忌々しそうに言った。

私はそれには答えず、一本向こう側の橋を気持ちよさそうに流れている車の屋根を見ていた。

私たちは「かつらぎ聖母園」という名の福祉施設に向かっていった。

奈良と大阪の県境近く、葛城山の麓にある福祉施設らしい。羽田を朝八時半に発つ関西空港行きのジャンボに乗り、用事を済ませたらまた東京へとんぼ返りする予定だった。

気がつくと、前のワゴン車の後部座席に座っている中年の女性があじつと私の顔を見つめていた。目が合っても逸らさない。同乗の連れに向かって何やら大声で話している。もちろん声は聞こえ

ないが、何を言っているかは容易に見当がつく。

「ねえねえ、後ろの車にいるの、葛城かつらぎよしのじゃない？」

そう言っているのだ。

私は耐えかねてサンバイザーを倒したが、彼女の視線から逃れることはできなかつた。

演歌歌手というのは、一度大きなヒットを出すと、かなり息長く人気を持続できる。ここ数年、年末恒例の国民的番組や有線のヒットチャートからは遠ざかっているものの、私の名前と顔は全国的に知られている。

デビュー曲の『葛城慕情』がヒットチャートを二か月以上に渡って独走し、年間レコード売り上げでもずば抜けた一位を獲得したのはもう十五年も前のことになる。ヒット曲というものが、ジャンルに関わらず国民的な共有物だったよき時代のことだ。

デビュー作が大ヒットという幸運に恵まれたが、そのとき私はすでに三十五歳だった。「遅咲きの大輪」「苦節二十年、演歌人生に花開く」などという陳腐なフレーズで彩られながら、私はほとんど諦めていた演歌歌手への道を歩き始めた。

そのきっかけを作った名曲『葛城慕情』は、今、私の隣で運転している速水允彦の作詞作曲ということになっている。

「駄目だな、こりゃ。思いきって左折してみるかな」

速水が言った。気がつくやうやく前方のT字路が見えてきていた。案の定、右折方向にはこの道と同じようにほとんど動かない車の列が見えていた。

「任せるわ」

私は深く考えることもなくそう答えた。今まで、何度となくそう言って彼に私の人生を委ねてきたように。

二十年前、私は全国を渡り歩くストリップパーだった。

芸名は茉莉村未幸^{まりむらみゆき}。十五歳の頃から歌手を夢見てきたが、十五年やってもまったくチャンスは掴めなかった。

デビューさせるといふ甘い言葉に乗せられ、自称芸能事務所社長や音楽関係者に、お金や身体を騙し取られたことは数限りない。挙げ句の果てに、どさ回りのストリップパーになっていたのだ。

「未幸ちゃん、そんなに歌が好きならステージで歌えばいいじゃん。一曲くらいならお客さんもちゃんと聴いてくれるよ。でも、二曲以上は駄目だぜ。踊る前に一曲だけ」

事務所の社長がそう言ったのを真に受けて、私は小さなアンプとカセットテープレコーダーを持ち歩き、ショーの最初に必ず一曲、好きな演歌を歌った。

仲間や、小屋の支配人には評判がよくなかった。歌がうまい下手ということではない。違和感が拭いきれないからだ。

女々しいことはやめると、ストレートに忠告する人もたくさんいた。まったく拍手のないことも珍しくないし、酔った客が「歌謡ショーじゃねえんだろーな」とやじることもあった。それに、もともと私は笑顔が作れない性分だった。笑顔を見せない女が、和服を着て切々と演歌を歌う……。

「あんたみたいに暗い踊り子さんも珍しいな。ステージが暗くなるから、歌はやめてくれないかね」

ある小屋では支配人からそう言われた。

しかし、中には「その暗さが色っぽい」という客もいたようで、私は頑固にそのスタイルを続けた。

私にとって、ステージの最初に好きな歌を一曲だけ歌うその時間だけが、自分の存在を確かめられる瞬間だった。残りの十数分間はどうでもよかった。

ヤニ臭い息を吐く男に、玩具で股間をつつかれている時間は、何も考えないようにしていた。

ストリップパーたちの中には、楽しんで踊っているという子もいなくはない。でも、私は違った。私には踊りの才能はないし、とりたてて美しい姿態を誇っていたわけでもない。私が生涯を通して求めていたのは、やはり歌だったのだ。

たとえ相手が裸を見に来ている男たちであっても、中には「ついでに」耳にした私の歌に、ほんの少しでも心を動かされる人間がいないとも限らない。そのわずかな、そして確認のできない可能性を捨てきれずに、私はストリップ劇場で歌い続けた。

ハンパゲさんに出会ったのは、京都の小屋でだった。

暗がりの片隅に、脅えるような目で身を潜めていた小男。

どういう病気かは分からないが、背中がひどく曲がっていた。

いつも汚れたハンチング帽をかぶっていたが、一度、他の踊り子が悪戯半分に^{*1}デベソの正面に座っていた彼のハンチングをひよいと取ったことがある。頭の右半分だけが醜く禿げていた。そんなこととは知らなかったその踊り子は、咄嗟のフォローができなかった。彼女は楽屋で何度も「悪いことしちゃった」と言っていたが、それ以来、踊り子や従業員たちは彼を「ハンパゲさん」と呼ぶようになり、ハンパゲさんは二度とかぶりつきの席には座らなくなった。

それにしても不思議な人だった。歳は当時で四十くらいだっただろうか。あるいはもっとずっと若かったかもしれない。なにしろ風貌からは年齢が分かりにくかった。

職業が何かも見当がつかなかった。開演と同時に来ていて、い

*1 ステージから突き出した部分をこう呼ぶ

つも夜八時頃まで粘っていた。ほとんど毎日のように、朝から晩までストリップ劇場の客席で過ごす時間と金がある人間の境遇を、私たちは楽屋でよく推理しあった。

遺産相続して現在無職。夜中に仕事をしている売れない小説家。金持ちの家の息子が結婚できないまま大きくなり、家族からも疎んぜられたままストリップに入り浸っている……。

どれもしつくりこなかった。いずれにせよ、ハンパゲさんは毎日同じ汚い服で現れたし、決してお金持ちには見えなかった。

ストリップ劇場は普通十日ごとに踊り子が総入れ替えになる。

一日から十日、十一日から二十日、二十一日から月末までという、月三回のローテーションだ。専属の踊り子を持つ小屋なら別だが、私たちのような旅の踊り子は、十日経つと、次の小屋へと旅立つ。

京都の小屋には、一年のうち、四、五回は世話になっていた。いつ行っても、ハンパゲさんはほとんど毎日のように姿を現した。

そのうち、もぎりのおばちゃんが教えてくれた。

「あのおっさんなあ、あんたのファンやで。あんたが出とるときだけ毎日来よる。他のときはたまにしか来んのやわ」

それはどうやら本当らしかった。

私は彼を意識して、できるだけ彼のいる方向に向かって脚を広げ、笑いかけた。

しかし彼は、ほとんど反応らしい反応を示さなかった。私がじっと見つめると、恥ずかしそうに目を逸らす。いつも二、三列後ろから静かに私を見つめているだけだった。

ただ、ショーの前に私が歌った後、他の客が誰一人手を叩かないときでも、ハンパゲさんだけは控えめに両手を動かしてくれた。音が出ないようなささやかな拍手だったが、私は十分嬉しかった。

あれはひどく冷え込んだ年末のことだった。

おばちゃんが楽屋を覗き込み、意味ありげな笑みを浮かべて私を手招きした。

「ハンパゲのおっさんからプレゼントやて。茉莉村のねえさんにつて。なんや、ただの紙切れみたいやけど」

そう言つて差し出したのは、本当にただの紙だった。卒業証書みたいに丸めてあり、皺の寄った緑色のリボンがかけられていた。クリスマスからは二日遅れていた。

最初は絵だろうかと思つた。頭が弱くて、子供のようにクレヨンで絵でも描いてプレゼントしようというつもりではないかと。リボンを外して広げると、それは五線紙だった。太い鉛筆で、ていねいにオタマジヤクシが書き込まれていた。ト音記号の書き方なども、結構堂に入っている。

題名もコードも記されておらず、ただオタマジヤクシだけが並んでいた。書いてある文字は「まりむらみゆきさんへ」という平仮名だけだ。下手な字だったが、ていねいに書かれていることは分かった。

「曲のプレゼント？ お礼言わなくちゃ。まだ客席にいる？」

私はおばちゃんに訊いた。おばちゃんは首を横に振つた。

「今、帰りよつたわ」

私はステージ衣装の上からコートを羽織ると、すぐに外に飛び出した。年末の雑踏の中を、とりあえず駅の方へ走る。

幸い、ハンパゲさんは足がのろく、すぐに追いつくことができた。

「ねえ、おじさん」

私はハンパゲさんの前に回り込み、屈み込むようにして彼の歩みを止めた。

彼は目を丸くして立ちつくした。

「あれ、おじさんが作ったの？ 私にプレゼントしてくれるのね？」
ハンパゲさんは少しおどおどしていたが、やがて怒ったような顔でこつくりと頷いた。

「おじさん、曲が書けるの？」

「書けるで」

ハンパゲさんの声を聞いたのはそれが初めてだった。

「専門はクラシックや。演歌は好かんけど、あんたのために特別に書いたんや。あんたにやる。言葉は苦手やさかい、歌詞は誰かに頼むか、あんたが自分で書きなはれ」

声量はなかったが、決して老け込んだ声ではなかった。近くでよく見ると、皺のない、まだ若い肌をしていた。背中が曲がり、頭が不自然に半分禿げていたことで、私は彼の年齢を勝手に高く見積もっていたのかもしれない。

「ありがとうね。大切にするわ」

「ほならな。わし、もう来いへんさかい」

「なぜ？」

「……金がのうなったわ」

ハンパゲさんは自虐的な笑みを浮かべると、私の横をすり抜けて先へ進もうとした。

私は反射的に自分のコートのポケットに手を入れていた。財布は楽屋に置いてきてしまったが、代わりに、作ったばかりの預金通帳と三文判に指先が触れた。通帳には六万円が入っている。

私はそれを彼のジャンパーのポケットに押し込んで言った。

「ごめんね。これ、少ないけど、私の気持ち。作曲料ということ
で、受け取って」

ハンパゲさんは押し返そうとポケットに手を入れたが、まだ私
が通帳と三文判から手を離さないでいたので、ポケットの中で私
の手を握るような形になった。

彼は熱いものにも触れたかのようにすぐに手を引つ込めた。

「私、嬉しいのよ。歌を聴いてくれたお礼。でも、もう来ちゃ駄目よ。あそこの入場料につき込んだ分には足りないだろうけれど、これで栄養つくもんでも食べてね」

ハンパゲさんは黙っていた。そして、諦めたようにそのまま駅のほうに歩いていった。

次のステージが間近に迫っていた私は、心に引つかかるものを感じながらも、彼の丸すぎる背中を短く見送ると、再び駆け足で小屋に戻った。

▽

「やったぜ！　なんだ、三〇九号線って、こつちじゃねえか。紛らわしい標識出しやがってよ。あのまま大渋滞の右折方向に行っていたらとんでもなかったぜ」

気がつくと車は今までの渋滞が嘘のように走っていた。

「あの橋のあたりで、道が急に途切れていたみたいだな。ずっと三〇九号を来ていたつもりだったのにさ。標識ってのはいつもそうだ。肝心なところにはないんだよな」

速水は口笛を吹きそうな調子で嬉しそうにアクセルを踏み込む。私は何も答えず、再び二十年前の記憶をたどり始めた。

▽

速水は売れない作曲家だった。

私が何度か仕事をもらったことのある芸能事務所に入入りしていて知り合った。

大して才能がないということは、私にもすぐに分かったが、同じ境遇をかばい合うかのように、いつしか深いつきあいになっていった。

あの年末の日を最後に、ハンパゲさんは二度と京都の小屋に現れなかった。速水との同棲生活を始めた私は、ハンパゲさんのことも、彼から貰った譜面のことも、忘れていった。

ハンパゲさんがくれた譜面は、そのまま二年間、私の旅行鞆の内ポケットに眠っていた。

大阪の小屋の仕事が終わって、次の名古屋の小屋まで十日間休みを取ったときのことだ。ちょうど桜の季節で、吉野の桜を見に行こうと、私は速水と一緒に奈良を巡っていた。

旅館に泊まったとき、鞆の中からその譜面が出てきて、私は思っていたように速水に見せた。彼は酔った勢いで、その曲に詞を付け始めた。『葛城慕情』といういい加減な題名は、たまたまそのとき泊まっていたのが葛城山の麓の旅館だったからだ。

翌年、私は歳を偽り、何人かの音楽関係者と寝て、速水允彦作詞作曲の『葛城慕情』というレコードを、半ば自主制作のような形で三千枚プレスした。デビュー曲の題名に合わせて、芸名は葛城よしのとした。

大手のレコード会社から契約の話が来るまでに半年、ヒットになるまでにさらに半年かかったが、それまでの時間の流れに比べれば、それはあつと言う間のことだった。

『葛城慕情』は、私の人生を大きく変えた。

翌年、私は夢に見た年末恒例の国民的歌謡番組に出演し、十二個もの賞を貰った。

速水も一躍「ヒットメーカー」として注目され、暫くは仕事が無い込んだが、結局『葛城慕情』を超えることはおろか、比較できるような作品すら残せなかった。

演歌は息が長い。『葛城慕情』は今でもカラオケの定番で、速水には毎年この曲だけでもそこそこの印税が転がり込む。私も、地方の小さな営業くらいなら、仕事が途切れることなく入ってく

る。速水が社長、私が副社長という個人事務所を構えて、私たちは今でも芸能界の片隅で生きながらえている。

言ってみれば、『葛城慕情』という貯金を少しずつ食いつぶしているわけだが、今の私は十分に幸せだ。

一度、芸能週刊誌が私のストリップパーとしての過去を暴いたこともあったが、それも私にとっては大した傷にはならなかった。むしろストリップをしながらも演歌歌手になることを夢見て歌い続けていたという苦労話の勲章が増えた。

そんなことより、私はハンパゲさんが『葛城慕情』の本当の作曲者として名乗りを上げることが怖かった。速水も、あまりの大ヒットに、次第に罪の意識にさいなまれていくようだった。ハンパゲさんが見つかったら、内々に示談にして、ある程度のお金を渡したいという程度のこととは考えていたようだ。

一度、彼に渡した私名義の通帳の口座に五十万円を振り込んだことがある。せめてものお礼のつもりだった。もちろん、あの曲のおかげで私たちが得たものに比べれば、あまりにも少ない額だったが。

どこかでひっそり死んでいてくれればいい……。正直、そう願ったこともある。『葛城慕情』の真の作曲者を知っているのは、世の中に三人だけだろう。ハンパゲさんが死んでいてくれれば、あとは私たち二人しかないのだ。

あるいは、ハンパゲさんはあどきの私にくれた譜面のことなど忘れてしまっているかもしれない。彼の手元に譜面が残っていないとすれば、歌詞もついていない思いつきのメロディーを、何年も覚えてはいないのではないだろうか……。そうあってほしい……。

二十年という時の流れは、そうした恐怖や戸惑いを次第に薄め

ていった。

一昨日、その名も「かつらぎ聖母園」という福祉施設の園長から思いがけぬ電話がかかってくるまでは。

「……山村世津子さんという名義の通帳と印鑑が出てきました……」

電話口の向こうで、野太い男性の声が私の本名を口にした。

その福祉施設で横松宗次郎よこまつという男性が死んだ。身よりのない、全額福祉事務所からの援助金による入所者だった。脊椎カリエスと肺気腫を患っていて、身体障害者手帳も持っていた。享年五十八歳。

彼の死後、部屋を片づけていると、何も持っていないなかつたはずの彼が、腹巻きの間に通帳と印鑑を縫い込んで隠し持っていたことが分かった。

その通帳の名義は山村世津子。銀行に照会すると、口座には六十万近い額が入っていた。入金記録は口座を開いた当初の六万円と、その後五十万円の振込が一度。引き出した記録はまったくない。普通預金だが、口座開設から二十年経った今は多少の利子も付いている。

通帳と一緒に、週刊誌のグラビアから切り抜いた演歌歌手・葛城よしのの写真も出てきたので、もしやと思って調べてみると、山村世津子は葛城よしのの本名だとわ分かったという。

福祉施設の園長は、恐らく彼が施設に入所する前にどこかで盗んだものだろうと判断したようだ。電話は、このお金をどうしましようか……という問い合わせだった。

委任状を書いてもらえれば、印鑑はあるのでこちらでおろし、施設への寄付金とさせていたいただきたいのですが……と、園長はほぼ断定口調で申し出た。一度はなくした金だし、名のある演歌歌手が、面倒なことを言うはずがないと踏んでいるようだった。

「待つてください。直接伺いますから」
私ははつきりとそう答えた。

△

三〇九号線はかなりの峠越えになる山道だった。空港で貰った地図では吉野方面への最短距離に見えるが、実際には曲がりくねって、運転も楽ではない。

かつらぎ聖母園は、葛城山の麓、静かな場所にあるキリスト教系の福祉施設だった。

道に面して幼稚園があり、その向こうに十字架をつけた教会の鋭角な屋根が見えている。老人ホームと身障者施設を併合した「聖母ホーム」はそのさらに奥にあった。

レンタカーを乗り付けると、都会ではあまり見なくなった、仰々しい屋根の霊柩車が停まっていた。誰かの葬式の最中らしい。ここでは葬式は日常の一部になっているのだろう。霊柩車も、その脇で手持ちぶさたで棺を待つ運転手も、どこかからかすかに聞こえてくる聖歌も、みなこの場所にはごく自然に調和していた。受付には誰もいなかった。人を捜して建物に入っていくと、喪服を着た六十代くらいの女性が二人、トイレの前で話し込んでいた。

「……それで、ミナヨさんの三百万の通帳ね、印鑑ごと園長が管理しているんですって。それでヨウコちゃんに、最低でも七十万寄付してほしいって言ってるんですって。残されたイクおじさんは普通の患者さんより手がかかるから、それくらいは寄付してほしいって言うらしいのよ」

「冗談きついやないの。なんやのそれ。そんなの、身代金やないか。イクおじちゃんがまだ施設にいるさかい、娘としては寄付せえ言われたら断りにくいいう腹やろ？ それに、イクおじちゃん、

全然惚けてなんかおらへんで。オムツしてるわけでも、車椅子でもないで」

「福祉事務所には言わないでほしいなんて言っているらしいから、園長のほうも後ろめたいのよ。はつきり言ってやらなくちゃ、ヨウコちゃんに。さっきの私たちのおみやげも、そっくり園長に取り上げられちゃうし」

「そやそや。おかしいで、あのおっさん……」

二人はそこで私たちに気づいて話をやめた。

「すみません、園長先生は……」

「あ、そんなら集会室やわ。葬式やってるねん。今日はお葬式が二つ重なってしもうてねえ。今お葬式しとるおばあちゃんのご親戚さん？」

関西弁のほうの女性が答えた。二人とも、今やっている葬式とは別の組の葬式に列席した後なのだろう。

喪服を着た背の低い中年の女性がやってきて、私たちをとりあえず寒々とした何も無い六畳ほどの部屋に通した。

「こんなことなら渋滞も何も関係なかったな」と言いながら、速水は新しい煙草の箱を開けた。

三十分待っても、誰もやってこなかった。

「こんなところで死んでったのか。その大作曲家のセンセイは……」

しんみりとそう呟く速水の口調には、もう苛立ちや不満は感じられなかった。

「ほんとに……」と相槌を打とうとした私も、思わず涙が溢れそうになった。

あのヒット曲がもたらした富のごくごく一部でもハンパげさんの手元に渡っていたら……、どうお詫びしても済まない重大な犯

罪を犯してしまった罪人の気分だった。

速水が煙草を一箱吸い尽くした頃、ようやく黒い背広を着た園長が現れた。

園長は挨拶もそこそこに、早口の大声で言った。

「だからわざわざ来ていただくようなことではないと申し上げたんですよ。横松さんはまったく身よりのない人でしてね、少しでも関係のあるかたならお話も伺いますが、なにせもう骨になりますし。で、あの通帳は盗まれたものではないとおっしゃるんですか？」

「違います。横松先生は私を歌手に育ててくださった恩師です。あれは先生にお預けしていたものです」

私は咄嗟にそう答えた。

園長は信じられないという顔をして黙った。時効になった窃盗事件ではないと主張することで、私が今なおその金の所有権を主張しようとしているとでも思ったのだろうか。

「死者にむち打つみたいだな真似はしたくないというのはよく分かります。どういういきさつで横松さんがあなたの通帳を持っているたのかは詮索しないことにします。で、どうでしょう。私たちもあのかたのお世話にはいろいろ大変なこともありましてね。施設のほうにご寄付いただければ本当に感謝いたしますが……」

「そういう話の前に、まず先生の霊を弔いたいのですが」

私はそう言うと、むっとした顔の園長を半ば脅すようにして、ハンパゲさん……いや、横松さんの骨が収められている納骨堂に案内してもらった。

納骨堂は扉が固く閉ざされ、遺影もなかった。

その前で手を合わせ、私は心の中で何度も彼への感謝とお詫びの言葉を唱えた。

なかなか動こうとしない私たちに痺れを切らしたように、園長

は「じゃあ、応接室に戻りましょうか」と促した。

「その前に、横松先生がいらっしやっただ部屋を見せていただけませんか？」

背後にいた速水が言った。

「ぜひ、見せてください。先生の生前をもう少し偲びたいんです」
私もそう言つて園長の顔を真っ直ぐに睨み据えた。

園長は露骨に面倒くさそうな顔をしたが、渋々私たちを別棟の建物に案内した。

横松さんが生活していたという部屋は、三畳に満たない、独房のような部屋だった。

荷物はすっかり運び出され、無人になった部屋の壁に、職人が白ペンキを塗っていた。

「まだ若かったのに、呆けがひどくて大変でしたよ。アルツハイマー型の呆けだったみたいでしてね。でも、こうして個室を与えて、好きにさせていたんです。他の施設ではこうはいきませんよ」
園長は自慢するような口調でそう説明しながらも、すぐにまた私たちを応接室に戻らせようと手招きした。

そのとき、私は見た。

塗装職人が部屋の壁の最後の数十センチ四方を塗り込めようとしているその場所に、細かく、楽譜が書かれているのを。

「待って！ それは？」

私は、思わず職人が驚いて手を止めるほどの大声を出していた。
園長が面倒くさそうに説明した。

「横松さん、ところかまわず落書きをする悪い癖がありましたね。みんなの迷惑になるんで、この個室を与えたということもあつたんです。おお、きれいになった。さっきまでは壁から床からあちこち落書きだらけだったんだが」

「落書きって……あれ、楽譜でしょう？」

「ええ、自分が作曲家になったような妄想を抱いてましてね。ところ構わずデタラメな音符を書いてしまおうんで、難儀しましたよ。この壁の塗り替えにも少くない金がかかっているわけですね。そういうのが積もり積もると、これが結構な額になるのですよ。横松さんの場合、身よりもなく、正規の入所金や寄付金なんかも……」

園長が暗に寄付の無心をしている間に、職人は最後に残った音符を、白いペンキで壁の中にきれいに塗り込めた。

「あ……」

私と速水は絶句したまま、呆然とその壁を見つめていた。

横松さんには、本当に身よりらしい人間が一人もないようだった。あるいは、いても名乗りを上げないだけなのかもしれない。ここに来るまでは、通帳のお金はこの施設に全額寄付するつもりだった。しかし、さっきの二人の老婦人の会話や、園長の態度を見て、私はすっかりへそを曲げていた。

最後まで「寄付を」と粘る園長をはねつけ、私は自分名義の通帳と印鑑を園長の手から奪い取るようにして返してもらおうと、かつらぎ聖母園を後にした。

町の中の書店で地図を買った速水は、帰りは、西名阪自動車道の柏原インターチェンジまで県道を北上すると告げた。

左手に、葛城山ロープウェイ乗り場の案内板が見えてきた。

「ねえ……」

私は運転する速水に声をかけた。

「このへんの旅館であなたが詞を付けたのよね。『葛城慕情』……」

「ああ、妙な縁だな」

「横松さんっていう名前だったんだ。あのおじさん、自分が書い

た曲がヒットしたことを知っていたのかしら？」

「通帳と一緒に、おまえのグラビアが出てきたというんだらう？」

茉莉村未幸のじゃない、葛城よしのの」

「あ……そうか……」

私は中途半端な返事をしたまま、それ以上の言葉を失った。

「どうだ？ 飛行機、明日の朝の便に変更して、今夜はこのへんに泊まっていけないか？」

速水は前を見つめたまま言った。

「任せるわ」

私は、またいつもの口癖を繰り返しながら、窓の外を見つめた。

葛城山は、ゆっくりと夕闇に包み込まれ始めていた。

／／／^{*2}参考曲『ねえ』（吉本裕子・歌） <http://yuko.cc>／／／

(了)

（「青春と読書」96年4月号）

^{*2}この曲のオリジナルタイトルは『葛城慕情』でした。でも、歌手がそれだけは勘弁してくれと言うので、散々もめた挙げ句、『ねえ』になったのでした。●作詞・吉本裕子、作曲編曲・たくきよしみつ、間奏のギターは吉原寛。たくきは他に生ギターとベースを弾いています。